

「山椒魚」を読んで

静岡大学教育学部附属浜松小学校 六年 木村 凜

猛暑が続いた今年の夏、父が我が家のトイレに閉じこめられてしまふというハプニングが起きました。大工さんに開けてもらい、四十分後によくやく救出された父は、汗だくになりながら「昔読んだ『山椒魚』の話を思い出したよ」と言いました。その言葉が耳に残った私は、さっそく図書館に行って、この本を手に取りました。

この小説は、体が大きくなって棲家の岩屋から出られなくなってしまった山椒魚と、偶然紛れこんできた蛙の切なくも心にしみる名作です。小さな出入口からうらやましそうに外の世界を眺めていた山椒魚。前後左右にしか体を動かせないほどの狭くて暗い空間で、毎日退屈に過ごしていた彼の前に、一匹の蛙が現れます。最初は激しく言い争ってばかりの二ひきでしたが、一年、二年と一緒にいる時間が長くなるにつれ、その感情は憎しみから共感、友情へと変わっていきます。

私がいちばん心に残ったことは、最後の場面で、弱った蛙が言った。「今でもべつにお前のことをおこつてはいないんだ」という言葉です。岩屋を出て早く自由になりたい蛙は、山椒魚に出口をふさがれ、餌も食べられないのに、どうして怒らないのだろうと不思議に思いました。でも読み返してみても、蛙が「今でも」と言っていることに気がつきました。「今でも」ということは、最初から怒っていなかったという意味です。もしかしたら、蛙は閉じこめられた瞬間から、山椒魚とけんかしながらも、狭い空間での共同生活を楽しもうとしていたのかもかもしれません。二年間も同じ境遇で過ごしたことで、山椒魚が親愛をこめた瞳で蛙を見るようになったので、蛙も意地を張るのをやめたとも考

えられます。

実は私も、この蛙と少し似たような経験をしました。それは以前、学校で友達とけんかをした時のこと。彼女もそんなに怒ってはいない気がして、私からあやまったのです。その時の蛙と同じように、私も照れくさかったので、「きわめて遠慮がちに」「ごめんなさいと伝えました。彼女は、「もういいよ、私の方こそごめんね」とあやまってくれて、ホッとしました。果たして山椒魚は蛙になんと言ったのでしょうか。物語はここで終わっているのですが、想像するしかありません。山椒魚はその後もずっと岩屋の中で生きていくのか、それとも蛙を外に出してあげるのか、もしくは、蛙は死んでしまうのか・・・話の結末は読者に委ねられています。

わずか十一ページという短編で、登場人物も少ないこの小説。それでも、淡々と進む物語の中に、二ひきの息づかい、空気や色、水の音などが手に取るように感じられ、文学の魅力がたくさんつまっている一冊だと思えます。読み返すたびに新しい発見があるという読書の醍醐味を知ることができました。

私も来年から中学生になります。山椒魚と蛙みたいに、真の友だちができるといいなと思います。

書名	山椒魚
著者名	井伏 鱒二
発行所	新潮社